

## 「Beruf — 神に召された仕事」

### ルカによる福音書 2章8～20節

日本基督教団 安行教会牧師・本学講師 田中 かおる

#### [1]

大学に学ぶ皆さんにとって、将来どんな職業につくか、ということは大きな関心事かと思います。あるいは、既に、大学の学部を決める時に、将来の職業を見据えて決めた方もおられることでしょう。

しかし、もしかしたら、仕事が有意義かどうかとか、自分の願っている職業を選ぶというよりは、とにかく経済的自立が第一目標で、そんなに自分の希望通りの職種を選んでいる余裕はない、と知っている方もいるかもしれません。生きていくために働く、一人前の社会人として経済的に自立するために働く…これもまた、必要なことです。

有意義な仕事を見出すことも大事、一方で、生きていくための職を得ることも必要です。でも、できれば、仕事するなら、働くなら、その仕事に意味を見出せるような職種、これこそ社会的にも、私にとっても有意義な仕事、「使命」を感じることでできる仕事につきたい、と思うのは、当然のことです。そういう職種に出会うことができれば、それはやはり「幸い」なことです。ですが、現実には、そうそう理想通りにいかない…というジレンマを抱えておられる方もいるかもしれませんね。

私が仕えている教会の近くに、キリスト教の老人施設があります。実は、私の夫の母が、ここでお世話になっていますが、スタッフの方たちの献身的な仕事ぶりにいつも感謝しています。有意義な仕事とはいえ、決して楽な仕事ではないことは、訪問するたびに見てとれます。その割には、お給料は決して高くないことも知っているのも、本当に頭が下がる思いでおります。仕事に「使命」を感じていなければとても続かない職種だと思っています。

実は、その施設のスタッフの一人(クリスチャン)N さんが、私の仕えている教会の礼拝に熱心に通っておられました。夜勤もある不規則な勤務状況の中、なんとか日曜日の午前中の礼拝に出席するため、シフトを組む段階で工夫をし、土曜日からの夜勤を終えて礼拝にでることもあれば、他の人が避けたがる日曜日夜の夜勤を申し出て、午前の時間を確保する、などをしておられました。出来得るかぎりの工夫をして、とにかくなんとしてでも礼拝に出たい、というその姿勢は、共に礼拝を守る者たちを大いに励ましてくれました。N さんいわく、  
「礼拝から力を頂いているのです。だから、何としてでも出たいのです」

ところが、今年の3月、N さんが、ご自分の故郷に帰って行きました。ご高齢のご両親の側にいて仕事をする、という選択をなさったのです。それは、それで、大事な選択でした。私たちは、寂しさを押さえきれませんでした。しかし、「他人の世話をしながら、自分の両親をほっておくのでは、証にならない」とのご覚悟に、寂しさを超える深い感動を覚えました。

Nさんが、故郷のご両親のもとに帰る、と決心するまでには、葛藤があったそうです。今の基督教の施設での仕事に生きがいを感じ、「使命」を覚えていただけに、悶々となさっていたそうです。しかし、ある時、故郷に帰ることも私に与えられた「使命＝神さまからの召命」とはつきりと受け取れた時があった、といます。それが、今年のクリスマス礼拝の時、今日、皆さんと一緒に読みました聖書の箇所による説教を聞いていた時だ、とおっしゃるのです。

[2]

今日の聖書の箇所は、イエス・キリストの誕生の次第を告げる聖書箇所です。クリスマス・シーズンにはしばしば、皆さんも耳にすることでしょう。

ここには、イエス・キリストの誕生の知らせを聞いた羊飼いたちの様子が記されています。この羊飼いたちの取った行動、また生まれたばかりのイエスに出会った後の彼らの変化に、大事なことが示されています。

当時の羊飼いという職業は、社会的・宗教的には「枠外」の職業でした。当時のユダヤ教の人々は、安息日規定をしっかり守ることが神の恵みに与る条件のように考えてしまっており、安息日には決められたこと以外してはならない、という規則の中で生きていました。ところが、生き物相手の羊飼いという仕事は、「安息日だから、今日はお休み」というわけにはいかず、年中無休状態でした。安息日規定を守ることは無理だったのです。…となると、羊飼いという仕事は、宗教上の規定を守れない「枠外」の仕事、神の救いからはずれている職種、となるわけです。

ところが、こういう「枠外」とされていた羊飼い達に、「救い主誕生」の知らせが一番先に告げられたのでした。

この知らせを聞いた羊飼いは、どうしたでしょう？

羊飼い達は、その知らせを聞いて、

「さあ、ベツレヘムへ行こう！」

と、その場から立ち上がりましたね。「あなたがたのために救い主がお生まれになった」と聞いて、「自分達とは関係ない！」とはせずに、自分たちのこととして、告げられた場所へかけつけましたね。

はたして、そこには、いわれた通りの姿の「救い主」が飼葉桶の中に寝かされていました。そして、彼らは、自分たちのための救い主が「飼葉桶の中かあ～なあんだ！とがっかりしてしまうのではなく、なんと、この救い主にお目にかかった後、「神をあがめ、賛美しながら」自分の持ち場である「羊飼い」の仕事へと戻っていったのです。

羊飼いたちにとって、この枠外の仕事から解放されることが「救い」なのではなくて、彼らは自分の持ち場に留まって、その役目を果たすことを喜びとできた、それが「救い」でした。「神をあがめ、賛美しながら」その持ち場に戻っていった、ということは、彼らは「救い」の何たるかを知った、ということです。この救い主によって彼らは変えられた…彼らは、救い主に出会って、自分達の仕事、自分達の存在意義、自分達の人生を新しく受け取り直すことができた、受け取り直して自分達の持ち場に戻って

ったのです。

この話を聞いて、Nさんは、「自分の仕事、自分に与えられた使命とは何か、を受け取りなおすことができました。私は、しつこくではなく、喜んで神を賛美しながら、自分に与えられている持ち場に帰る決心ができたのです」と語ってくれました。自分の人生、自分の使命を受け取り直して、故郷に帰ることができたのです。…これをキリスト教の視点からいうと、「神に召された＝召命」といいます。自分に与えられた「神からの召し」に、Nさんは気づいたのです。

[3]

今から500年前の宗教改革者、マルティン・ルターはこの聖書の箇所から、人にはそれぞれ「神から与えられた使命、神から与えられた職業＝神に召された仕事」があり、それを発見することが、喜びだと気づきました。このことをルターは「Beruf」と呼びました。英語で Calling です。日本語に置き換えると「召し」「召命」「天職」となります。

ルターが「Beruf」(神からの召し、召命、天職)という時には、何か特別の仕事のことだけをいうのでない、といっています。

「それぞれの仕事がどんなに(この世的には)つまらない仕事にみえても、あるいは、家事や子育てのような(一見)地味に見える日々の営みであっても、それに愛をもって関わるのが、神の召しに仕えることになる」と言っているのです。…その良い例として、救い主に出会って変えられた羊飼いのことを語っているのです。

[4]

「神の召し」に仕える、とは、「神から与えられた固有の使命」に仕える、ということです。私たち一人一人に、神は、「固有の使命」を与えてくださっています。それが何か？ということ、ぜひ、学生の皆さんに聖学院大学で学ぶ中で探求していただきたいと思います。

「神から与えられた使命は何か？」「神の召しとしての仕事は何か？」を受け取ることができると、心から、静かな喜びが湧き上がってきます。人生に「意味」を見出すことができます。羊飼いたちのように、また故郷に帰ったNさんのように、「神をあがめ、賛美しながら」人生を歩む幸いを味わいます。

2017年10月13日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)